

戦後の沖縄における洋裁教育(第一報)

洋裁学校の変遷とその役割

琉球大教育 藤原綾子

目的 第二次大戦後、洋裁教育への需要が高まり、各地に洋裁塾がつくられ、やがて学校へと発展していった。本研究では沖縄全島の洋裁学校の変遷について調査し、それらの果たした役割についても検討する。

方法 文献調査は洋裁学校の沿革史、記念誌、その他について行った。
聞き取り調査は沖縄全島の認可洋裁学校を対象に創立当時から現在までの状況、教育方針、講義内容、生徒の年齢層、その他について行った。

資料 として学校基本調査票の写し、記念写真、スナップ写真等を収集した。
結果 戦後、洋裁教育への需要が高まり、各地にできた洋裁塾は施設設備、テキスト、材料とどれをとっても不十分の中で出発した。昭和32年に各種学校制度ができると全島で13校が認可をうけ、当時の各種学校の5割を占めていた。この頃から教育内容、学校行事などが充実して、技術のみならず教養も身につけることができた。

その後昭和50年までに22校と増え生徒数も増加したが、その後はしだいに減少している。第一次ベビーブーム世代が中卒を卒業した昭和37~40年頃は高等学校受験に失敗した多くの若者をうけ入れ、その後幅広い年齢層の人口を受け入れ、教育し、多くの人材を世に送り出した。現在県内でデザイナー、洋裁教師、洋装店の経営、その他に活躍している。そうした状況を考慮すると戦後の沖縄で洋裁学校の果たした役割は大きいといえる。